

---

# Invidia

豚小屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Invindia

### 【コード】

N5549BA

### 【作者名】

豚小屋

### 【あらすじ】

これもとあるサイトの雑談板にて書いたものです。見にくいですよ。

(前書き)

某作品での人気ランキング1位だった彼女も、豚の手にかかるとこ  
うなってしまうのです。

ところで、一人称って難しいですね…。

おやおや？

またお越しただけたのですか。

ようこそ。

皆様と再びお会いできることを心よりお待ちしております。

こうしてまた会えましたのも何かの縁でしょう。

よろしければまたお付き合ってくださいませ。

さし。

今宵はどんな御伽噺が始まるのでしょうか…。

ここはとある城下町。

大きな戦などは、とくに昔の話。

町民は平和に暮らしておりました。

そんな平和な町の片隅には一軒の仕立屋があり、

その仕立屋を営んでいるのは若き女主人でした。

今宵お送り致しますのは彼女のお話。

恋に仕事に一生懸命生きる健気な女性の物語でございます。

彼女は気立ての良さと確かな腕で近所でも評判の娘といわれております。

しかし、彼女にはたった一つの悩み事がありました…。

それでは。

ごゆっくりと、ご覧ください。

さあ、仕立てを始めましょう

この町に仕立屋を構えて早数年。

最初は私に仕立てを覚えてくれた母のように上手くいかず色々ありましたけど。

笑顔で一生懸命に頑張ってきたおかげか、今ではこの仕立屋を鼻根

にしてくれるお客さんが増えてきたのでなんとかやっつけていけます。

なので、それなりに時間にも余裕ができたんですけど。

そうなると思っっちゃうことがあります。

「あの人、今日も帰ってこないんですね…」

私の愛するあの方は、お恥ずかしながら色恋に節操がないんです。

仕立屋という仕事上、女性のお客さんが多いのは仕方のないことなんですけど。

あの浮気者さんめ。

まったく。私というものがありません。

家に帰ってきやしないなんて。

私がどれほど寂しい思いをしていると思ってるんですか。

私が毎晩枕を涙で濡らしていることなんて、あの方は知らないんです。

「だけど、お仕事は頑張らなきゃ」

私の手には母から貰った裁縫鋏。

母が亡くなる前に私にくれた大切な形見の鋏。

研げば研ぐほどよく切れる上物の一品です。

それを片手に一生懸命。

私は今日もお仕事に精を出すのでした。

「またご贖戻くださいね」

今日はお得意先の呉服屋さんへ。

仕立てを頼まれていた着物をちょうど届け終わったところです。

「いいお天気」

今日も町はいつも通り。

穏やかで平和そのものです。

店に帰るまで、お散歩がてらゆっくりと歩きましょうか。

ここ一帯の界隈は活気に溢れていて色んなお店があるんです。

いろいろと見て回らうよ。

「あっ……」

大通りに出た途端、私はある人物を見つけました。

あの人。

あの人がいた。

あのやんちゃそうな顔。

間違いありません。

でも。

「おい何しとんねん。早よ行くぞ」

でも。

「ちょっと待ちなさいよ。ねえ、あれ何かしら？」

隣のその女の人は一体、誰？

「あ？あれは…桃色の熊？」

「馬鹿。どうして熊がここにいるのよ」

「熊おんねんからしゃあないやろ。それより今馬鹿言つたな？」



「さあ？なんの？」

「お前なあ」

「ほら、行くわよ」

「お、ちよ、引っ張んな」

とても楽しそうに笑ってる。

「っ…」

赤い着物がよく似合う、綺麗な女の人と仲睦まじく歩くあの人の姿を見て。

私は堪えきれずその場をすぐ離れました。

「う…ひくっ…、っふ…」

気付けばもう日も暮れていました。

店に急いで帰ってきて。

途端に我慢しきれなかった涙が溢れてきて。

拭っても拭っても止まらなかった。

きっと酷い顔になっちゃってるんだろっとなあ。

でもそんなことは気になりません。

あの光景が私の頭から離れてくれないから。

あの人の浮気性は今に始まったことじゃない。

それも含めて受け入れようって決めていました。

それでも。

「寂しい、よう……」

心は言うことをきいてくれません。

本当は寂しくて苦しくて仕方ないんです。

思い出すのはあの人と、

一緒にいた女の人。

ちよっと勝ち気そうだけど陶磁人形のように白くて透き通った肌と、  
綺麗な顔立ちだった。

二人とも心からの笑顔を浮かべてた。

羨ましいな。

私もあんな笑顔であの人の隣にいたい。

「私、魅力無いのかなあ…」

考えるのはそんなことばかりでした。

だけど。

「だけど、お仕事は頑張らなきゃね」

お仕事は待ってくれませんか。

母から貰った形見の鍬を片手に一生懸命。

今だって私の頬は涙で濡れているけれど。

私は着物の縫直しに取りかかることにしました。

「はい。それではすぐにお問い合わせしますね」

今日は仕立てに必要な布を仕入れるために馴染みのお店へ。

これって実はいろいろと手間がかかったちゃうんですけど、でもお仕事をやる以上手を抜くなんてできませんよね。

それにしてもどうしたのかな？

なんだか町の雰囲気少し暗いというか、いつものような活気がないような気がします。

反物屋のご主人が、何か事件があったって言っていたけど。

そんなことを思い出しながら歩いていると、橋の前には人だかりがありました。

瓦版でも見ているのかな。

そう思って近づいて。

人だかりの中にいるあの人を見つけるのに時間はかかりませんでした。

けど。

「早く行きましょう？ね？」

隣の女の人は一体、誰？

「おう…、行くか」

「ほ、ほら。今日は私がご飯作ってあげますから」

「そう、やな。頼むわ」

どこか落ち込んだ様子のある人と。

あの人に寄り添う、淡い色調の黒髪が綺麗な女の人。

大人しそうな人で、緑色の帯がとても似合ってます。

ああ、そんな女の人が好きなんですネ…。

そんなことを思いながら。

人だからから離れていく二人を私は見送るしかありませんでした。

前の人とは違う女の人。

性格とか気性とか全然違って控え目な感じの人だった。

気の強い人が特別好みという訳でもないんですね。

次から次へと乗り換えてるんですか。

それともたくさんの方の人と関係を持つてるの？

もう。

どうしてかな。

どうして私じゃ駄目なのかな。

心の中ではそんな思いばかりがぐるぐると駆け巡っています。

「痛っ」

そのことに気をとられてたせいか針で指を刺しちゃいました。

咄嗟に血の出ている指を口へ。

口の中で僅かに鉄っぽい臭いと、なんともいえない味がします。

いけないいけない。

考え事をしながらだとお仕事になりませんし、丁寧な仕上がりにな  
んてできません。

当たり前なことなんですけどね。

いつまでも塞ぎ込んでいる訳にもいきませんし。

今までも頑張ってきたんだもの。

「お仕事は頑張らなきゃ」

お仕事はお仕事。

ちゃんとしないと。

多分、今の私の目は赤く腫れているんでしょうけれど。

それでも私は帯の修繕に努めることにしました。

「ことりちゃんも気をつけてね」

いつもお世話になってる甘味屋さんの女将さん。

気前がよくて何かと私のことを気にかけてくれます。

「はい、ありがとうございます」

このところ働き通しで、甘いものが欲しくなった私はここへ来たのですが。

世間話もそこそこに、お目当てのものを手に入れて帰ろうとした私に女将さんが心配そうな顔で言ってきたこと。

また事件が起こったらしい。

確かに町もにわか騒ぎ始めています。

最近は物騒になってきたわねえ、なんて言いながら私の心配をしてくれる女将さんに感謝しつつ。

私は店へ帰ることにしました。

「あじっ？」

すぐそこには私も利用するかんざし屋さんがあります。

今、あの人が入っていったような。

一瞬迷ったけど。

確かめてみようと思いました。

こっそりかんざし屋を覗くと。

いました。

やっぱりあの人だった。

それと。

「どれが似合うかな？」

あなたの隣の、

「あ、これなんかどうや？似合うと思ってる」

「そう？じゃあ…これでどうかな？」

「似合ってるやん。よしや、買ったるから待ってけ」

「はい」



隣の女の子は、一体誰？

「はあ……」

何度目かの溜め息。

溜め息をつくると幸せが逃げていく、なんていいますけど。

出ちゃうものは仕方ないですよ。

かんざし屋で見たあの娘。

雪のような色をした髪の毛の、ちょっと幼い感じの女の子。

私より年下かな。

そんな娘に黄色いかんざしを買ってあげて。

何を考えてるの？

一体何をしようというの？

本当に、見境のない人ですね。

あの様子だと手広く女の子に手を出してそつです。

これで溜め息をつくなというほうが無茶ですよ。

なのに。

なんで好きになっちゃったんだろう？

とか。

好きになっちゃったんだもん。

とか。

悲しいはずなのに考えることはそんなことばかりでした。

好きになった弱みですね。

「まったく、もう」

でもそれはそれ。

「お仕事は頑張らなきゃ」

早く仕上げてしましましょう。

鋏を片手に一生懸命。

今日もお仕事に精を出します。

それにしても。

お母さんがくれたこの鋏。

こんな色だったかなあ…。

「ふう。これでおしまい、と

しゃきん、と。

最後の仕立て糸を鋏で切って。

ようやくお仕事も一段落です。

さて、と。

ここまで頑張ったんだし。

いいですよね？

私だってあなたに会いたいです。

でも、あなたはここへ帰ってこないんだもの。

ずっと私は待っていたのに。

だから。

会いに来てくれないのならば。

此方から会いに行きましょう。

鉄を構成するのは二本の刃

お互いが身を寄せ合い、すり合わせることで役を果たす

それはまるで仲睦まじい夫婦のようだと

母は私にかつて語った

ああ、

なんて綺麗なお月様。

澄んだ上品な満月の光が静かに橋を照らしています。

橋から川を見下ろすと、水面にはお月様が写ってゆらゆら揺れています。

とても静かな夜。

聞こえるのは川のせせらぎと遠くの虫の声だけ。

誰にも邪魔されない。

私達だけの夜。

あ…。

やっと来てくれた。

あの人の顔は見慣れているけど。

見飽きることなんてなくて。

そして私の頬はいつも赤くなる。

ゆっくりとあの人へ歩を進めていきます。

待たせちゃってごめんなさい。

本当はもっと早く会いたかったんですけど。

あなたと会うためにおめかししてたんです。

赤い着物を纏って。

縫直して丈を直したんですよ

次に緑の帯を巻いて。

ほつれていた箇所も修繕したから綺麗になっているでしょう？

そして黄色いかんざしを髪に挿して。

少し汚れていたけど、丁寧に汚れは落としましたから

あなた好みの女になりました。

どう？

私、

綺麗でしょう…？

ねえ、

「  
「

おい、聞いたか？

ああ、まただろ？

つたく、これで四人目かよ

しかも未だに下手人が誰かわからねえって

早いとこ捕まってくんねえかな。おちおち外にも出れやしない。

…にしても、惨過ぎるよな

皆鋭い刃物で首をばっさり、だからな

殺されたの綺麗な娘達ばっかだったよな。可哀想に

そんで今度は男だろ

ああ。つっても、この度見つかったのは男が持ってた巾着袋と大量の血の跡だけらしいけどな。おそらく生きちゃいないだろうが、  
仏さんはどこにいるのやら

そついやあ、あの男もよ



今日は今までにないほど町中が騒いでいますね。

店の外もずいぶんざわついています。

どうしたのかな。

ん？

それにしても酷い人ですね。

えっと

久しぶりに会ったのに。

ずっとずっと待って、

ようやく会えたのに。

はじめまして

こんばんは

だなんて。

まるぽい、

「まるで他人みたいじゃない」

あの男もよ、可哀想になあ。嫁さん殺されちまって

それだけじゃねえ。嫁さんの二人の妹まで殺されたんだ。仲のいい家族だったのに不憫でならねえよ

ああ。ぶつきらぼうな男だったが嫁さんを本当に大事にしてたな。嫁さんも気の強い娘だったが、別嬪さんで器量良し。その上旦那にベタ惚れだよ。近所じゃおしどり夫婦ってちよいと有名だったんだぜ？なのによお

旦那の方は嫁さんが死んじまつたあと身寄りのなかった妹達の面倒見てたんだろ？本当の妹みたいに可愛がつてよ

妹二人にしたって姉さんが死んじまつて悲しいのに気丈に義理の兄貴を支えてたんだ。姉さんみたいに別嬪で健気な娘達だったのにやるせねえなあ

「まるで、他人みたいじゃない……」

「だけとお仕事は頑張らなきゃ」

大事な鉄を片手に一生懸命。

でも、その前に。

お仕事を始める前に。

今日一日を頑張るためのおまじない。

一番奥の部屋。

襖を開けると、あの人が眠っています。

この寝顔はどれだけ見ても飽きません。

あっ。

いけないいけない。

このまま見ていたいけどそういつ訳にもいきませんね。

名残惜しいですけど。

「今日も一日頑張りますね」

そう言って顔を近付けて、

胸に真つ赤な彼岸花を咲かせた愛する人の唇に、

自分の唇を重ねました。

照れちゃいますね。

ふふっ。

「これからはずっと一緒ですよ」

ずっとずっと。

永遠に　　。

いつから狂い始めたのか。

それとも最初から狂っていたのか。

それは彼女自身にもわからないでしょうね。

ただ、横たわる男と唇を重ねた彼女、二人の姿は。彼女の持つ赤く染まった裁縫鋏のようでした。

さて。

いかがでした？

お気に召されたのならば幸いにございます。

もういい時間ですね。

夜道にはお気をつけて。

それでは。

またお会いできることを願って。

ごきげんよう。

(後書き)

誰が誰だかわかりますか？  
ちなみに関西弁の男はまたしても豚の脳内にいるキャラです。

元ネタ

ニコニコ動画 悪ノP様  
「円尾坂の仕立屋」

D・C・ 某歌姫 他数名

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5549ba/>

---

Invidia

2012年1月15日02時46分発行